

『飛行機、電車、郷土料理』

新幹線に乗るのは嫌いじゃない。むしろかなり好きだ。仕事をしていても時々窓から景色を楽しむことができるし、いろんな人が乗ったり降りたりするのを見る。なんというか旅情がある。それに対して空路は、そもそもうちから空港までの移動が面倒だし、空港では何かと行列をしないとイケない。席もだいたい窮屈だ。でも今回ばかりは飛行機を選択せざるを得ない。そうでなければ何日もかかってしまう。

服装が問題だ。もう肌寒くなっているので上着は必須だが、現地に着いたら要らなくなるだろう。なるべく軽く、小さく畳めるものを着ていこう。現地の同僚によれば、いまは一番いい季節ということだ。もう台風も来ないし、爽やかな気候だという。台風が来ないのは朗報だ。あそこの台風は本当に冗談にならない。

その日一番早い飛行機で出発し、午前中に着いたが、やはり陽射しが強い。そこでサングラスを忘れてきたことに気がついた。以前来た時はすぐに車を借りて走ったが、今回はモノレールを使って空港からこれ一本で中心街まで行くことにする。渋滞もないし、眺望もいい。とても便利で快適だ。周りは大きなスーツケースを持った観光客ばかり。みんな華やかでうれしそう。ここはずっと最貧県で、現在も最貧県の一つであり続けているが、こうして人に愛されているのがわかると嬉しい。

講演会場へは同僚の運転する車で移動する。家々の屋根の上には、対になった二体のライオンのような置物がある。この地方特有の魔除けだ。私の故郷の料亭なんかでは同じ目的で家の外側に塩を置いたりするが、そんなものはここではすぐに風に飛ばされてしまうだろう。ライオンは愛らしいだけでなく、安定感があっていい。

仕事を終えて、気の合う仲間と食べる美味しい料理はこの上ない喜びだ。豚肉を使った料理が多いが、海産物も豊富で、鰹や昆布で出汁をとった料理はどれもあっさりしていて食べやすい。ピーナッツで作った豆腐や、とても苦いおぼけキュウリみたいな野菜を炒めた料理もある。ゆっくりとしたペースで様々な現地料理と一緒に、名物の蒸留酒を少しずついただく。風味があっておいしい。ふわりと酔いが訪れる。

戦争中は多くの蔵元が爆撃や火炎放射器によって失われたそう。三か月だ。三か月の間、市民が暮らすこの場所にたくさんの兵隊が来て、激しい戦闘が行われた。兵隊でもない、生身の人間が、直接、戦火に晒されたのだ。三か月。途方もない数の人の命とともに、伝統ある文化財の多くが永遠に失われた。けれどもわずかな酵母は県外に避難されて保管されており、それを戦後になって探し当て、工夫を重ねてよみがえらせ、再び旨い酒を作れるまでに復興した蔵元もあるという。

その場所に実際に来てみないとわからない種類の感慨がある。

帰りの飛行機まで時間があるので、車で小さな島へ行ってみた。7月だと夏の昼間に外で泳ぐのは不可能だが、この季節は子どもたちが昼間から気持ちよさそうに海水浴をしている。エメラルドグリーンに輝く海の、波はとても穏やかだ。魚屋を覗く。赤や青の色とりどりの魚が並ぶ。マグロなんかもある。海辺には魚の肉を干していた。聞いてみると、イカと、なんとサメの肉を干しているらしい。海から遠い古都から来た身にはとりわけ、もの珍しい。

こちらの人の話し方はとてもソフトで優しい。空港へ向かうタクシーの運転手に、ここの料理は口に合ったかと聞かれた。もちろんです、特にあの小さな島で食べた天ぷらが美味しかったという、老齢の運転手の顔がぱっと輝く。そうですか、あすこまで行かれたか、いやそれはよかった。私もね、あすこの「もずく」の天ぷらが大好きでねえ、時々買いに行くんですよ。

これで「もずく」の天ぷらが心に刻まれた。今度家で作ってみよう。